# 丹那の朝に君を想う

中山　卓

# 第一章　縁側の西瓜と、母の記憶

「ねえ、お母さん。お母さんの初恋って、どんな人だったの？」

高校生になったばかりの娘、葵（あおい）から突拍子もない質問を投げかけられたのは、雲一つない夏の午後のことだった。じりじりと照りつける太陽が縁側に濃い影を落とす。庭の百日紅が、陽炎の向こうで小さく揺れている。テーブルの上には、この夏採れたばかりの立派な平井西瓜が台所に置かれていた。

「どうして急にそんなことを聞くの」

智子（さとこ）が包丁を動かす手を止めた。葵は麦茶の入ったグラスをカランと鳴らし、少し悪戯っぽい視線を向けてきた。

「だって、お母さん、高校の頃は田農の食品科学科だったんでしょ？　どんな恋をしていたのかなと思って。今の私と同じくらいの年でしょ？」

智子は、真っ赤に熟した西瓜を丁寧に三角に切り分け、古いガラスの大皿に並べた。一切れを手に取り、縁側に腰を下ろす。シャクリ、と心地よい音を立てて口に含むと、果汁の瑞々しい甘さと、ほんのりとした青臭さが喉を潤していく。胸の奥底に仕舞い込んでいた、重い記憶の引き出しがそっと開くような音がした。

「そうね……。すごく日に焼けていて、いつも高校のクレーコートで、泥だらけになりながら白いゴムボールを追いかけている人だった。ぶっきらぼうで、口数も少なくて。でもね、誰よりも優しい手をした人だったのよ」

「へえ、軟式テニス部の人なんだ。お母さん、その人なんていう名前？」

「芹澤信（まこと）くん。出会ったのは、高校一年生の秋。今の葵と同じ、十六歳のとき。あの、突き抜けるように青い空が広がった、田農祭の日だったわ」

西瓜の黒い種を白い小皿に落としながら、智子の視線は、三十年前の遠い夏の記憶、いや、あの鮮やかな秋の空へゆっくりと向かっていく。目を閉じれば今でも、学校の敷地内から響いていたラケットがゴムボールを捉えるパーンという打球音、放課後の音楽室に鳴り響くサックスの音色、彼が乗っていたロードバイクのチェーンが奏でる金属音、函南の街並みを走らせて風を切る音、あの頃のいろいろな懐かしい音が昨日のことのように蘇ってくるのだった。

## 第二章　始まりの田農祭

智子が芹澤信と出会ったのは、高校一年生の十月、雲一つない秋晴れに恵まれた「田農祭」の日のことだった。

食品科学科での智子は、クラスの誰もが遠巻きに眺めるような、少し近寄りがたい雰囲気を纏った生徒だった。幼い頃から音楽に没頭し、吹奏楽部では一年生ながらアルトサックスのファーストを任されるほどの実力。凛とした佇まいと、品のある言葉遣いに、周囲からは「高嶺の花」と噂されていた。

そんな智子が任されたのは、数ヶ月前から学科で準備を進めていた田農祭の「かぼちゃプリン」の模擬店だった。かぼちゃは、夏の猛暑の中、生徒たちが汗にまみれて収穫し、倉庫でじっくりと追熟させて甘みを引き出した最高のものだった。

本番当日。実習棟の前に設けられた白いテント。周囲の女子生徒たちが賑やかに呼び込みの声を上げる

中、智子は一人、テントの奥で静かにプリンを箱に詰め、スプーンを添える作業を黙々とこなしていた。そんな智子にふと声がかかった。

「一つ、もらえるか」

低く、しかしよく通る声がして、智子はそっと目を上げた。

目の前に立っていたのは、一人の男子生徒。日に焼けた精悍な肌に、短く刈り込まれた黒髪。制服のシャツの袖を無造作に捲り上げた腕には、引き締まった筋肉のラインが見える。その背中には、テニスラケットが入ったバッグが斜めに背負われていた。ポケットの隙間から、白いゴムボールがのぞいている。

「はい。百円になります」

智子はいつも通り、感情の起伏を見せない丁寧な声で応じ、冷えたプリンのカップを差し出した。

男子生徒はポケットから小銭を出すと、智子の手のひらにそれを落とした。指先がわずかに触れたとき、智子は小さく息を呑んだ。彼の掌は、驚くほど硬く、たくさんのマメで覆われていた。ふっと毎日懸命にラケットを振り抜く姿が目に浮かんだ。

彼はその場でプラスチックのスプーンを動かし、プリンを口に運んだ。そこで、彼の表情がすっと緩んだ。

「……うまいな。かぼちゃの自然な甘みがしっかり残ってる。カラメルの苦味もちょうどいい」

「ありがとうございます」

智子は小さく一礼した。

「皆さんが、夏の暑い盛りに実習で収穫してくださったかぼちゃですから。私たちはその素材を壊さないよう、何度も試作を重ねたんです」

少し硬い口調で、けれど誇りを胸に語る智子を見て、男子生徒は照れくさそうに視線の先をはずした。

「俺、畜産科の一年。芹澤信。……軟式テニス部」

「芹澤くん……」

「お前たちが作ってくれたおかげで、夏の畑で泥だらけになった甲斐があったよ。ありがとな！」

信はぶっきらぼうにそう言い残すと、ラケットバッグを揺らしながら、人混みの中へと消えていった。智子は、彼が去った後も、自分の手のひらに残る手の硬い感触を思い出しながら、彼が口にした「泥だらけになった甲斐があった」という言葉を、静かに反芻していた。

## 第三章　コートに響く音と、自販機の田農コーヒー

それからというもの、二人の距離は、言葉にしないまま少しずつ縮まっていった。

放課後、校舎の裏手にあるクレーコートからは、いつも信が放つ鋭いストロークの音や、白いゴムボールがラケットに弾ける「パコーン」という小気味よい音が響いていた。そして、その音に導かれるように、放課後の古い音楽室からは、智子が奏でるサックスの音色が、夕闇に向かって伸びていった。

吹奏楽部の厳しい練習の合間、智子は窓辺に立ち、楽器を持ったまま眼下のコートを見下ろすことがあった。そこには、誰よりも遅くまで残り、一人でサービス練習を繰り返す信の姿があった。夕日に照らされ長い影を引く彼の姿は、どこか孤独だった。でも、なぜか智子の目を惹きつけて離さなかった。

智子は、一人っ子として育ち、いつも自分の部屋で一人、静かに物事と向き合う時間に慣れ親しんできた。一人でいることの寂しさも、心地よさも、どちらも知っている。だからこそ、誰にアピールするでもな

く、ただ自分の感覚を確かめるように淡々とボールを打ち続ける信の姿が、不思議とすんなり心に馴染んだのだった。サックスのキーを指先で探りながら音を重ねていく自分の時間と、彼が一人でコートに立つ時間が、どこか遠くで響き合っているような気がした。理由を言葉にできるわけではないけれど、同じ種類の静かな時間を知っている人。そんな親近感に似た淡い感情が、智子の胸の奥にゆっくりと芽生え始めていた。

そんな二人の距離を一気に縮めるきっかけとなったのは、購買での出来事だった。

田農の校内には専用の自販機があり、名物の「田農牛乳」と「田農コーヒー」の紙パックが並べられていた。そして男子生徒の間では、『意中の女子に自販機で田農コーヒーを奢る』というゲン担ぎがあり、男女の恋が生まれる場所となっていた。

ある日の部活終わり、信は不自然な様子で智子に声をかけた。

「……おい、喉乾いただろ」

そう言って、智子を購買の自販機前へと誘った。自販機までの道のりがいつもより遠く感じた。

「奢ってやるよ」

信はポケットに手を突っ込んだまま自販機の前に立つと、コイン投入口に小銭を流し込み、「田農コーヒー」のボタンを二回続けて押し込んだ。

ガトン、ガトン、と重い音を立てて落ちてきた二つの紙パック。信は少しそっぽを向いたまま、ストローを挿した田農コーヒーを智子に手渡した。

「……お前もこれ好きだろ。同じやつがいいかと思って」

「ありがとう、信くん。嬉しい」

智子は受け取ったパックのストローを咥え、コクのある甘さを口に含み、信をのぞき見た。自販機の白い

蛍光灯に照らされた信の耳の裏が、真っ赤に染まっていた。信も自分の田農コーヒーのストローを咥え、二人で並んで同じ甘さを味わった。不器用で言葉数は少ないけれど、自分に対してどこまでも真っ直ぐな信。その冷たい紙パックの感触とともに、信の存在は智子の胸を確実に満たしていくのだった。

飲み終えた紙パックをゴミ箱へ落とすと、信は照れくささを紛らわせるように短く呟いた。

「……送るよ。今日はもう帰るんだろ」

並んで歩く帰り道の静けさが、先ほどまでのぎこちなさを少しずつ溶かしていくようだった。

その日を境に、二人の放課後は自然と時間が重なり合うようになっていく。

部活が終わる頃には、あたりはすっかり群青色の夜に包まれている。智子が昇降口を出て校門へと向かうと、駐輪場から細いフレームのロードバイクを押してきた信が校門の脇で待っている。

「帰るぞ」

信のぶっきらぼうなその一言を合図に、二人は並んで歩きだす。言葉こそ交わさずとも、どちらともなく待ち合わせるこの時間が、いつしか二人だけの約束になっていた。

## 第四章　坂道の登校路とルピアの灯り

智子の家は、学校から熱函道路を少し東へ進んだ仁田にあり、彼女は徒歩で通学していた。一方、信の通学スタイルは際立っていた。信が暮らすのは、険しい山々に囲まれた盆地・丹那の中でも西方に位置する地区だ。

丹那の西方から学校へと向かう長い下り坂。ペダルを軽く二、三度漕ぐだけで、ロードバイクは一気に加

速する。切るような冷涼な風が頬をかすめ、制服のシャツを大きく羽ばたかせた。ペダルを漕ぐ足を止め、風を切って下っていくその視界の右手には、どこまでも青く透き通った天空にそびえ立つ、雄大な富士山の姿が凛と広がっていた。朝日に照らされた白銀の雪冠を横目に見ながら、滑り込むように学校へと到着する—それが信の朝だった。

「朝は最高なんだよな。風を切って走ると、目が覚める」

実家が代々続く酪農家である信は、たまに朝早く起きて、牛舎で牛たちの餌やりや搾乳を手伝った。

「朝から牛の世話をした日は、ご褒美に親父が車で送ってくれるんだ。でも帰りはバスでじっくり揺られることになるけどな」

放課後、仁田にあるショッピングセンター『ルピア』の駐輪場で、信は愛車のロードバイクのタイヤを拭きながら爽やかに笑っていた。

部活を終えた二人は、智子の家の近くにあるルピアで寄り道をするのが習慣になっていた。

智子は吹奏楽部での後輩の指導や卒業後の専門学校の悩みを話し、信は胸いっぱいに膨らむ将来の「夢」を楽しそうに語った。

「俺さ、高校を卒業したら、静大の農学部に行きたいんだ」

信は、智子の目をまっすぐに見つめて言った。

「親父、年中休みなしで牛舎立ってるからさ。朝早くから夜まで働いてんの見てると、すげえなって思う反面、この先ずっと同じやり方じゃキツいんじゃないかって思うんだよ。うちの畑の土とか草のこと、もっとちゃんと勉強して、エサを自分のとこで全部まかなえるようにしたいんだ」

缶ジュースを飲みながら、将来の夢について語る時間は、二人にとってかけがえのない時間だった。
智子の家はすぐ近くだったが、ルピアを出ると、二人とも自分の歩幅をゆるめ、智子はロードバイクを押しながら歩く信に付き添った。
「じゃあ、智子。ここで」
「ええ。気をつけてね、信くん」
信は意を決したように息を吐くと、サドルに跨がり、ペダルに足をセットした。
信の自転車は仁田の街並みを抜け、いよいよ平井の激坂の入り口に差し掛かる。見上げるような道路の向こうへ、壁のように急勾配の坂道が立ちはだかっていた。
「頑張れよー！」
通り過ぎる車の窓から、地元の大人が声をかけていく。しかし、すでに前傾姿勢で全身の体重をペダルに乗せ、息を切らし始めている信に、返事をする余裕など到底ない。歯を食いしばり、必死の思いでハンドルを押さえ込んでペダルを漕ぎ進める彼の背中。平井の激坂の途中で、ついに自転車を降り、諦めたようにロードバイクを押して歩き出す。それが信の日常だった。
その年の夏休み、智子は一度だけ、信の誘いで丹那にある芹澤牧場へ遊びに行ったことがあった。
山間にある牛舎の中でのんびりと草をはむ牛たち。牛舎を案内してもらったあと、信は大きなステンレス製のタンク「バルククーラー」がある涼しい部屋へと智子を連れて行った。
「これ、搾ったばかりの生乳を速攻で冷やしてるんだ。出荷前の殺菌もしてないやつ。酪農家でしか飲めない特権なんだぞ」
信が清潔な柄杓でバルククーラーからすくい上げ、コップに注いでくれたその牛乳は、驚くほどキンキン

に冷えていた。智子が一口飲むと、これまで飲んだどの牛乳とも違う、生クリームのように濃厚で、けれど後味はすっきりと澄んだ甘みが口いっぱいに広がった。

「美味しい……！　すごい、信くん、こんな美味しい牛乳、飲んだことない！」

智子が目を輝かせて「美味しい、美味しい」と飲んでいる姿に、信は柄杓を戻しながら苦笑いし、少し呆れたように言った。

「おいおい、智子。いくら美味いからって、あんまり飲みすぎるとお腹ゴロゴロするぞ。殺菌前の搾りたてだからな」

そう言って笑う信の横顔と、夏の冷たい牛乳の味覚は、智子の心に永遠に刻まれる鮮烈な思い出となった。

## 第五章　暗転

二年生の秋が深まる頃、信の身体には目に見えない異変が静かに始まっていた。その異変は砂時計の砂の一粒一粒がゆっくりと落ちていくかのように確実に進んでいた。

軟式テニス部の新部長として、誰よりも大きな声を張り上げてクレーコートを走り回っていた彼の動きが、十一月半ば頃から目立って精彩を欠くようになった。信自身は「少し風邪気味なだけだ」と周囲にうそぶいていたが、その強がりも肉体の変化を覆い隠せなくなっていく。

「信くん、今日のストロークの音、私のサックスよりも少しテンポが遅れていたわよ」

放課後、実習棟の裏手で、食品科学科の白衣をまとった智子が冷たい麦茶のボトルを差し出しながら言っ

た。高嶺の花と称される彼女が、唯一その視線を柔らかく和らげる相手。それが信だった。
「そうか？　お前のサックスが早すぎるんだよ」
信はぶっきらぼうに笑おうとしたが、その顔色は、日焼けした肌の奥で土気色を帯びていた。さらに、彼が何気なく作業着の袖を捲り上げたとき、智子は息を呑んだ。引き締まった前腕の皮膚に、禍々しいほどに濃い紫色の皮下出血がいくつも浮かび上がっていたのだ。
「その腕、どうしたの……？ラケットが当たったの？」
「さあな。牛舎で暴れた仔牛の角にでもかすったんだろ」
信は気にする風もなく袖を戻した。でも、智子の胸の奥には、氷水を一滴ずつ流し込まれるような不穏な予感が広がり始めていた。
そして、その予感は最悪の形で現実となる。
十一月の終わりの夕暮れ、音楽室でリードを湿らせていた智子の耳に、突如としてコート側から鋭い悲鳴が届いた。それは歓声ではなく、明らかに異常を知らせる、引きつった声だった。
慌てて窓からコートを見下ろすと、そこにはあり得ない光景が広がっていた。
信が、糸の切れた人形のように赤土の上へ突っ伏していた。傍らには、投げ出されたラケットと、力なく転がる白いゴムボールが見えた。
「おい、信！　しっかりしろ！」
「息、荒くないか！？　誰か、保健室の先生呼んでこい！」
遠目からでも、彼がまったく動けない状態であるのが分かった。駆け寄った部員たちが信の身体を仰向けにひっくり返したが、その顔はどす黒く、異常なほどの汗が噴き出している。尋常ではない速さで上下する

胸、浅くヒューヒューと鳴る苦しげな呼吸の音。呼びかけに対して、彼の視線はどこも結ばず、ただ虚空を彷徨うだけだった。

「だめだ、意識がない！　救急車だ、早く！」

部員たちの怒号が、夕闇の迫る校庭に響き渡る。

智子は慌てて楽器を置いて校庭に向かって走った。やがて、放課後の静かな学校に、救急車のサイレンが鋭く、残酷に響き渡る。智子は、目の前で起きている事態を飲み込めず、ただ茫然とその音を震えながら聞いていることしかできなかった。

## 第六章　入院、治療

順天堂大学医学部附属伊豆長岡病院に緊急搬送された信は、そのまま数日間に及ぶいくつもの精密検査を受けることになった。

智子は学校にいても全く授業が頭に入らない。駐輪場に残されたままの彼の細いロードバイクを見つめては、胸が締め付けられるように苦しくなる。

「信くん、詳しい検査の結果が出るまで、そのまま伊豆長岡の順天堂に入院することになったの。しばらく学校には来られないわ」

部活の顧問の先生からそう告げられたとき、智子の頭の中は真っ白になった。そして一週間後、朝のホームルームで担任から告げられた病名は、急性白血病――。教室が凍りつくなか、智子はただ自分の指先が震えるのを見つめていることしかできなかった。

すぐに信の闘病生活が始まった。医師は血液のデータと信の体力を見ながら、まずはマイルドな飲み薬や弱い点滴から慎重に治療を開始した。抗がん剤投与による身体への急激な負担を減らすためだ。

治療が始まった頃、デイルームの公衆電話からかかってくる信の声は、まだ以前の明るさを残していた。

『最近は静大の学校案内を毎日読んでるよ。農学部のカリキュラム、すごく面白そうでさ。実習に行けない分、今のうちに知識だけは入れておこうと思ってな』

血液中の異常細胞の数は順調に減っていった。週を追うごとに、医師は段階的に抗がん剤の強度を上げ、より強い複数種類の多剤併用療法へと切り替えていった。

しかし、薬の作用が強くなるにつれ、信を襲ったのは、副作用による激しい倦怠感と、深い気持ちの落ち込みだった。吐き気と全身の重だるさに四六時中苛まれ、ベッドの上で丸くなる時間が増えていく。身体を蝕む毒素のような薬の副作用は、あんなに強靭だった彼の心をも削り取っていった。

『……智子、俺、もう駄目かもしれない』

夜の八時、固定電話から聞こえる信の声から、かつてのハリは消え失せていた。声のトーンは低く沈み込み、何を話しかけても「……そうだな」「……別に」と気のない返事しか返ってこなかった。受話器の向こうからは、彼のトレードマークだったあの太陽のような笑顔は見えてこない。重苦しい溜め息ばかりが漏れるようになっていった。鬱のような暗い影が、信の心を完全に覆い尽くしていた。

「信くん、諦めちゃダメだよ！　静大に行くんでしょ！？　私、待ってるから！」

智子は泣きそうになりながら受話器を強く握りしめて叫んだ。

『……分からねえよ。先が見えねえんだ』

プツン、ツーツーツー……。

無情に切れる公衆電話。智子は冷たくなった受話器の上にそっと手を重ね、自分の無力さに涙を流しながら、暗い廊下でただじっと立ち尽くすのだった。

実習が多くを占める農業高校において、一年間の長期休学は避けられなかった。それでも信は、どん底の感情の浮き沈みを繰り返しながらも、みんなに追いついていこうと途切れがちな意識のなかで教科書を開こうとし続けた。

そして、入院から半年以上が過ぎ、治療がいよいよ最終段階に入った。強力な骨髄抑制のある抗がん剤の投与へと移行したとき、初めて信のトレードマークだった黒髪が、枕元に一筋、また一筋と抜け落ちていった。完全に髪が抜け落ちたとき、彼の血液中の異常細胞は消滅した。信は、体力が限界まで削られる凄絶な治療を耐え抜き、なんとか寛解状態へと漕ぎ着けたのだった。

## 第七章　二人だけの季節、もう一度の青春

約八カ月にわたる過酷な抗がん剤治療を乗り越え、奇跡的に数値が安定した信は、病院を無事に退院することが許可された。

季節は八月。信は田方農業高校のコートへと帰ってきた。しかし、彼の籍は高校二年生のまま。かつての同級生である智子たちは三年生となり、信は一つ下の後輩たちに混ざって、もう一度高校二年をやり直すことになった。

「……おう、智子。置いていかれちまったな」

放課後の駐輪場で、抜け落ちていた髪が柔らかく伸びはじめ、少し痩せた身体にぶっきらぼうな、けれど

懐かしい照れ笑いを浮かべた信が立っていた。その横には、ホコリを払われ、ピカピカに磨き上げられたあの細いロードバイクがあった。

「ううん、置いていってなんかいないわ。信くんが学校に戻ってきてくれて、本当に嬉しい」

智子は目頭が熱くなるのを必死に堪え、心からの笑顔を返した。

ある秋の休日、信の父親の軽トラの助手席に智子を乗せてもらい、久しぶりに芹澤牧場へ来た。

「ほら、智子」

信が手渡してくれたのは、あの夏の思い出と同じ、バルククーラーでキンキンに冷やされた搾りたての牛乳だった。

「やっぱり美味しい……！信くんの家の牛乳が、世界で一番美味しいわ」

智子が笑顔で飲み干すと、信は「だから、飲みすぎるとお腹ゴロゴロするぞって」と呆れ顔を作りながらも、嬉しそうに目を細めた。

ある日、夕暮れに染まる帰り道で、立ち止まった信が突然ロードバイクのハンドルを握り直し、隣を歩く智子をじっと見つめたことがあった。

「智子」

「なあに、信くん？」

「……俺さ、もう一度高校二年生をやり直して良かったよ。お前と同じ学校で、こうして同じ帰り道を歩けるなら、一年の遅れなんてどうってことねえ」

函南の風が二人の間を吹き抜け、智子の制服のスカートと、信の伸びかけた黒髪を揺らした。「好きだ」という直接の言葉ではなかったが、それは信の口から出た、精一杯の告白だった。智子の胸はサックスの最高

音を鳴らしたときのように震え、言葉にならない愛おしさがこみ上げた。
「私もよ、信くん。私だって、信くんと一緒にこの道を歩けて嬉しい」
二人は微笑み合い、黄金色の夕焼けの中、ゆっくりと歩を進めた。この穏やかで温かな放課後が、ずっと、いつまでも続いていくのだと、二人は疑いもしなかった。

## 第八章　急変

智子たちの卒業式が目前に迫った、二月のことだった。信にとっては「二度目の高校二年生の冬」の終わり、世間が卒業シーズンへと向かう足音を聞く頃。定期検診を受けた信の血液データが急変を告げた。白血球の数値が異常に跳ね上がり、正常な細胞が再び消えかけている。「再発」だった。
「大事をとって、もう一度伊豆長岡に入院することになった。卒業式には、顔を出せると思うな」
病院のデイルームの公衆電話から、信は悔しさを押し殺すようにぶっきらぼうに言った。それが、智子が聞いた彼の最後の声になった。
再入院からわずか数日で、信の容態は急激に悪化。再発した病魔は前よりも凄まじい勢いで猛威を振るい、強力な抗がん剤の投与も虚しく、信の体を蝕んでいった。信の意識は急速に混濁していった。
二月の最後の金曜日、激しい雨の降る夜のことだった。
深夜十一時近くになった頃、突然、廊下の固定電話が甲高い音を立てた。
トゥルルル、トゥルルル――！
いつもの信からの電話を待ち焦がれていた時とは違う、不吉な胸騒ぎを覚えながら智子が飛びつくように

受話器を上げると、聞こえたのは涙で震える信のお母さんの声だった。
『智子ちゃん……信が、信の容態が急変して……！　今から、すぐ病院へ来られる！？』
頭の中が真っ白になった。智子はパジャマの上に上着を羽織って、裸足のまま玄関を飛び出した。激しい雨の中、仁田の家の前に滑り込んできた芹澤家の車に飛び乗ると、車は猛烈な勢いで、夜の国道を伊豆長岡の順天堂病院へと向かって走り出した。車内に響くワイパーの激しい音だけが、智子の恐怖を煽り立てていた。

## 第九章　大粒の涙、そして

案内された病室のドアを開けると、そこには無数の管やモニターに囲まれ、白いベッドに横たわる信の姿があった。浅く不規則な呼吸を繰り返す信の頬は土気色に変わり、あんなに強かった足腰も、ロードバイクのハンドルを固く握りしめていた手も、驚くほど細く、冷たくなっていた。
「信くん……、信くん！」
智子はベッドの傍らに歩み寄り、彼の冷たい手を両手で包み込んだ。
「信くん、私、まだかぼちゃプリンの完成版、食べてもらってないよ……。もう一度高校二年生をやり直して、静大に行くって言ったじゃない……！　購買でまた一緒に田農コーヒーを飲もうって、約束したじゃない……！　私の卒業式だって、見届けてくれるって……！」
智子は祈るように叫び続けた。退院してからのあの愛おしい数ヶ月間、二人で笑い合ったルピアの窓辺、放課後の帰り道で夕焼けを見上げたあの瞬間の温もりが鮮明によみがえり、二人の未来が消えていく絶望が

涙となって智子の頬を伝い、信の手の甲を濡らした。
その時、信の指先が、ほんのわずかにぴくりと動いた。智子が息を呑んで彼の顔を見つめると、信の閉じられた目蓋の隙間から、大粒の涙が静かに溢れ出し、浅黒い頬を伝って枕へとこぼれ落ちた。
それは、呼びかけに対する彼の、最後の、そして精一杯の反応だった。二度目の高校二年を戦い抜き、夢に向かって生きようともがいた彼の誇りと、あの穏やかな放課後に智子と交わした溢れるような想いが、その一筋の涙に宿っていた。
お互いの「好きだ」という気持ちを、ついに言葉で告白し合うこともできないまま、数分後、心電図の音は長い一本の直線に変わった。
芹澤信は、智子の学年の卒業式を目前に控えた二月後半、春の始まりの頃、十八歳という若さで、静かに息を引き取った。

## 第十章　丹那の朝に

「――それからね、お母さんは静岡の専門学校を出て、一生懸命修業して、この函南に戻ってきて小さなお店を開いたの。信くんの家の、芹澤牧場の濃厚な牛乳を使ってね。『TANNA』っていう名前の洋菓子店よ。あのとき彼が『うまい』って笑ってくれたかぼちゃプリンを、一番の看板メニューにしてね」
智子はそう言って、縁側で遠い目をしながら語りを終えた。
隣に座る娘の葵は、いつの間にか麦茶を飲む手を止め、静かに母の話に聞き入っていた。葵の瞳には、ほんのりと涙が浮かんでいる。

「お母さん、その信くんのこと、今でも好き？」
葵の素直な質問に、智子はふっと優しい微笑みを返した。
「ええ。今でも、これからもずっと大切な人よ。あの人が病室であんなに頑張って生きようとしていた姿を知っているから、お母さんは今、こうして美味しいお菓子を作っていられるんだもの」
智子はそう言って話を終えると、片付けもほどほどに車のキーを手に取った。
「さ、葵。少しドライブに行きましょ」
智子はそう言って葵を車に乗せた。
智子の運転する車は、仁田の街中を抜け、平井の激坂を一気に上っていく。かつて信が立ち漕ぎで挑んだあの思い出の坂道だ。車が急勾配を上り切り、熱函道路のトンネルの手前を折れると、突如として眼前に視界が開けた。
「……わあ、きれい……！」
助手席の葵が思わず歓声を上げ、身を乗り出した。
そこに広がっていたのは、緑豊かな盆地に広がる広大な田園風景と、その向こうにそびえる山々の、息をのむほど雄大な丹那の大自然だった。どこからともなく聞こえてくる牛舎の牛たちの鳴き声と牧草の匂いが風に運ばれ、どこまでも高い夏の空が、その大地を優しく包み込んでいた。
「函南に、こんなに広くて綺麗な場所があったなんて……知らなかった」
感動で目を輝かせる葵の横顔を見つめながら、智子は車を静かに道端に止め、ふっと愛おしそうに目を細めた。
「素敵なところでしょ。ここが、信くんが育った場所よ」

車を降りた二人の頬を、丹那の爽やかな風が吹き抜けていく。

智子は今も、新しい朝を迎えるたびに想う。

芹澤牧場の朝搾り牛乳をボウルへ注ぐ、その白い渦の中に。丹那の山並みを黄金色に染め上げていく、透き通った夜明けの光の中に。通学路の先にいつも変わらずそびえていた富士の姿や、あの夕暮れのバス停で並んで飲んだ、少し照れくさそうだった彼の横顔の中に。そして——信が誰よりも愛し、守りたかったこの丹那の朝の中に。

芹澤信という少年は今も、智子の胸のなかで、静かに、けれど確かに生き続けている。

# 丹那の朝に君を想う

2026 年 10 月 24 日　発行

著者　中山　卓

令和 8 年度 函南町立図書館 8 月～11 月ＹＡ展示・企画冊子
編集・発行　函南町教育委員会教育部生涯学習課（函南町立図書館）
電話番号　055-979-8700
住所　419-0122　静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるものとします（主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関すること）。ただし、当館は著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとします。また、すべての文章は原文のままとし、当館で校正・校閲作業は行っておりません。

田方農業高校で出会った酪農家の息子の信と吹奏楽部の智子。惹かれ合う二人だが、高２の秋に信が白血病を発症し、一時は寛解するもその後再発し、卒業間近に他界する。残された智子は悲しみを乗り越え、洋菓子店を開く。

